

みんなの特別支援教育～特別ではない特別支援教育へ～

＜「みんなの笑顔」特別支援教育研修会＞

11月11日（月）に、テーマを「**通常学級における特別支援教育の充実**」とし、管内小中学校の特別支援教育コーディネーターを対象に研修会を実施しました。講演や研究協議を通して、特別支援教育とは、**障害の有無に関わらず、全ての子どもたちのために全ての教員が関わる教育**であり、いわば「**みんなの特別支援教育**」であるということを学びました。

講演 関西国際大学 中尾 繁樹 教授

特別支援教育の本質は、「子どもの実態把握」

「困った子」ではなく、「**困っている子**」であり、その子の「困り感」への「**気づき**」が**出発点**である。子どもの発達を支援していくのが教師である。

実態把握では、子どもの行動だけでなく、行動の背景や学力の状況、家庭環境等、**目に見えない部分も見ようと意識する**ことが大切である。

「何ができて何ができないのか」を「**Why**」「**What**」の**視点で分析**し、「**どこでつまづいているのか**」を的確に捉え具体的な指導を行う。
（例）授業中のおしゃべりが多い→「**Why**」「**What**」→授業に集中しにくい？授業が分かりにくい？逆におしゃべりが少ない時はどんな時？

ユニバーサルデザインの
視点を踏まえた授業



- ・授業のユニバーサルデザイン(UD)化を進めるには、何より実態把握が大切
- ・児童生徒の困り感を見取り、手立てや支援を考え実践すること = **授業のUD化**
- ・確かな**実態把握** → 適切な**目標設定、指導** → **学力の向上、様々なスキルの向上・獲得**へとつながる

参加者の声

- ◇ 特別支援教育＝障害児教育ではなく、特別支援教育＝「子ども一人一人を見る」＝未然防止の教育ということ学んだ。発達をどのように支援するのか、学級一人一人の状況をよく把握した上で授業を個別化していくことも大切だが、全体の学級集団に対しても、どのように授業を組み立てるのかをデザインする力を付けていくことも大切である。
- ◇ 「配慮のいらない子はいない」という中尾先生の言葉が印象に残った。分かる授業より全ての子が参加できる授業づくりを目指すことや、子どもたちの困っているところを見付けて先に対応することの大切さを学んだ。

通級による指導の充実と通常の学級との連携のあり方

＜通級指導担当者交流会＞

12月20日（金）、中丹地域の通級指導担当者を対象に、令和6年度「通級指導担当者交流会」を開催しました。「通級による指導の充実と通常の学級との連携のあり方」をテーマに、講演・研究協議、実践交流を通して、通級による指導（自立活動）を通常の学級での学びとつなげるための実践や工夫について、また通級指導担当者としての校内での役割について学びを深めました。

講演・研究協議

京都教育大学 講師 鈴木 英太 様

最近の動向や校内連携の視点について、そして支援を考えるときに大切なことなどを具体的に教えていただきました。

- ☆ 通級担当者が「プレイヤーのみでないマネージャーの視点」を持つこと
- ☆ 「できない⇒できる」にするのではなく、「できた⇒できる」という自信をつけることなど



実践交流

交流の柱

「一人一人の障害の状態や発達段階に応じた自立活動にするには」「通級による指導での学びを学習や生活の向上につなげるには」

各校の実態や悩みも共有しつつ効果的な実践を伝え合い、その後の全体交流では、「児童生徒本人のニーズを大切にしている」という実践など、通級による指導の効果を高めるために大切なことを再確認することができました。



参加者の声

- ◇ 個別の指導の大切さと同様に、通常の学級での支援が変わることの大切さも学んだ。
- ◇ 特別支援の対象者についての現状から、通常の学級を変えていくということの必要性を強く実感し、だからこそ、**本当の意味での連携を充実させていくことが大切だ**と感じた。
- ◇ 事例の検討から、**目標と支援を具体的に設定することの大切さ**を学ぶことができた。
- ◇ 不登校や通級指導を受ける児童が増えていく中、通級を受け皿にするのではなく、**学校や学級を変えるために自分なりにできることをやってみることが必要だ**と分かった。
- ◇ 他校で実践されていた、学級にどんどん入り、T2のような形で子どもにかかわることで**共通理解がしやすく、担任からも通級を理解してもらえ**るようになったという実践は、自分にもつなげていきたい。